

研 究

乳児院における食事援助の
子どもの年齢構成の違いによる検討大塚 己恭¹⁾, 青木紀久代^{2,3)}

〔論文要旨〕

乳児院では、大舎制から小規模グループケアへの移行が進んでいる。小規模グループケアでは、子ども4～6人と特定の援助者2～3人が一つのユニットで生活するようになり、これまでの生活構造や養育形態に変化が生じる。本研究では、生活場面の一つとして食事を取り上げ、養育形態の違いによって援助者の子どもへの関わり方が異なるのかを検討した。すなわち、通常の大舎制の食事形態としての同年齢群（①18か月未満、②18か月以上）と、小規模グループケアの食事形態として想定される①、②の月齢が混合した異年齢群を設定し、食事場面の観察を行った。そこでの援助者の子どもへの関わりを「食事介助」、「情緒的体験の共有」、「複数での食事体験の共有」、「その他」の4カテゴリーを用い比較した。その結果、異年齢群では、18か月未満児に対する「食事介助」が増えることがわかった。また、18か月以上児に対しては、「情緒的体験の共有」と「複数での食事体験の共有」が少なくなる可能性があることがわかった。これより、小規模グループケアの食事では、18か月未満児への食事介助に注意が向きがちになるため、食事の自立がある程度進んだ月齢の高い子どもへの関わりが手薄にならないよう、配慮と工夫が必要となると示唆された。

Key words : 日本の乳児院, 小規模グループケア, 生活臨床, 食事

I. はじめに

1. 社会的養護における生活臨床の視点

社会的養護とは、何らかの理由で養育者と暮らせない子どもに対し、公的責任で保護・養育し、養育に困難を抱える家庭への支援を行うことをいう。社会的養護施設には、乳児院、児童養護施設などが含まれる。これらの施設は、子どもたちの生活の場であり、医療、福祉、心理などの多職種が協働して、さまざまな支援を行っている。

ここでの心理職の支援は、子どもたちの生活の場をケースの理解および回復と成長の中心の場として捉え、支援する、いわゆる「生活臨床」が中心となる¹⁾。

もちろん、子どもの第一の支援者は養育者の代わりとなる大人（以下、援助者）であり、心理職が子どもと援助者の「関係性」がより良くなるための支援をすることが重要となる²⁾。そのためには、心理職が生活場面の一つひとつで大人と子どもの相互交流を丁寧に捉えなおし、相互交流が継続的に行われやすい環境と、適切なアセスメントをする視点を見出す必要がある。

2. 社会的養護の小規模グループケア化

ところで、欧米における施設養護の先行研究は、大規模な施設環境で育つ子どもたちの一部に、知的能力の遅れ、愛着の形成不全、過活動などの行動の問題が生じることを指摘している³⁾。海外の大規模な施設養

Difference in Caregivers' Behavior during Feeding as per Infants' Age at Infant Homes

[3001]

Miyuki OTSUKA, Kikuyo AOKI

受付 18. 1. 5

1) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（大学院生 / 臨床心理士）

採用 19. 6. 19

2) お茶の水女子大学基幹研究院（准教授 / 臨床心理士）

3) 白百合心理・社会福祉研究所（所長 / 臨床心理士）

育は最低限の物理的環境や情緒的相互作用の不足などの構造的ネグレクトがあり、これらが子どもたちの発達や行動に影響するとされる⁴⁾。現在では、施設環境の改善や職員の応答的な関わりの訓練などにより構造的ネグレクトの改善に努めているが⁵⁾、まだ十分に進められておらず、国際的には里親が推進されている。

一方、日本の社会的養護は施設養育を中心としていたため、大舎制の施設養護の改善について子どもの権利委員会からの複数回の勧告を受け、2011年から里親委託の拡充や小規模グループケア化が進められてきた⁶⁾。現在では、愛着形成に重要な時期である3歳未満児は、概ね5年以内に里親委託率75%以上にするを目標とし、乳児院は家庭養育では困難なハイリスク児の受け入れが求められることとなった⁷⁾。日本も里親委託を増加させる政策に変わり、施設養護の縮小が進められているが、2016年10月時点で、乳児院は136施設あり、入所児は2,901人いる⁸⁾。今後も乳児院が子どもたちの個別のニーズに合わせ、育ちを支えていく重要な拠点であることに変わりはない。

3. 小規模グループケア化による養育形態の変化

大舎制の施設から小規模グループケアの施設への移行によって、養育単位の小規模化が実施され、落ち着いた雰囲気の中で、子どもと援助者との密なやりとりが継続的に行われやすくなる。このことにより、子どもと援助者の関係性の構築が促されることが予想される。また、ユニット化という生活環境の変化や、援助者1人あたりが年齢差のある乳幼児を2人まで担当するという養育形態の変化が生じ、小規模グループケアでは年齢差のある子どもたち（以下、異年齢群）に同時に関わるが増えていくと予想される。

異年齢群では、きょうだい関係に似た相互交流が生まれる。たしかに、年上の子どもは年下の子どもの手助けをすることにより、年下の子どもは年上の子どもの行動を観察することにより、発達が促進される良さがある⁹⁾。一方で、援助者にとって異年齢群での関わりは、困難も生じやすい。例えば、異年齢の子ども同士が関わる場を設定するだけでは、子ども同士の関わりがうまく成り立たない¹⁰⁾。子どもの発達によって相互交流の様式は変化するため¹¹⁾、異年齢の集団養育では、援助者が子どもの発達差を考慮した計画を立て、子どもたちの個人差を理解し、彼らのニーズを読み取る力を訓練していく必要がある¹²⁾。

以上の先行研究は保育園での幼児を対象にしたものが多いが、小規模グループケア化する乳児院でも、異年齢群での援助者の関わりを考えていくことが非常に重要である。

4. 食事での相互交流と子どもの発達

小規模グループケア化で変化する生活場面はさまざまあるが、食事は援助者が子どもの発達に合わせて関わり方を変化させることが求められる場面の一つである¹³⁾。食事は生理的な満足感と、相互交流による心理的満足感を同時に得ることができる¹⁴⁾。離乳食の時期には、乳幼児と養育者が1対1のやりとりを積み重ね、食事での相互交流パターンを形成していく。意図のぶつかり合いを通して、他者とうまくやりとりする方法を獲得する機会でもある¹⁵⁾。

また、食事は子どもの年齢が上がるにつれて、会話を楽しむ場になっていく¹⁶⁾。毎日約3回行われる食事は、社会性を育む重要な機会でもある。日常生活での関わりにおいて、援助者が子どもの関心事を共有する行動^{17,18)}や、内的な情動状態を共有する情動調律^{19,20)}などの高い感受性と応答性のある関わりを行うことが、子どもの情緒や社会性の発達を促すとわかっている。そのため、食事場面で援助者の子どもへの関わり方を検討することは重要だと考える。

5. 本研究の目的

以上より、本研究では、小規模グループケアにおける食事援助に焦点を当てる。具体的に、現在大舎制の乳児院であるA乳児院において、小規模グループケアで想定される食事援助場面を実験的に設定し、食事場面における援助者の関わり方の特徴の違いを明らかにした。

II. 方法

1. 観察対象

大舎制養育が行われるA乳児院で働く援助者と、入所している子どもを対象とした。援助者の乳児院経験年数は0～15年であった（平均4.9±3.6年）。また、子どもたちの月齢は9～42か月であった（平均18.3±7.7か月）。

2. 観察手続き

A乳児院が小規模グループケア化される前年の5

～10月に調査を実施した。A 乳児院の食事時間内で、通常の同年齢群での食事場面に加え、子どもの年齢が混合の条件でも食事をしてもらった。撮影の際、観察者は日常の食事場면을壊さないように注意を払い、観察対象者との交流を最小限にした。

3. 観察場面

A 乳児院に入所している子ども 2～3 人と援助者 1 人の食事場面の撮影を行い、18 場面を分析に使用した。A 乳児院では基本的に、食事の自立が進んでいない同年齢群は子ども 2 人、食事の自立が進んでいる同年齢群は子ども 3 人で構成されており、その食事場面を対象とした。食事の発達的な自立が質的に大きく異なることを考慮して、月齢が 18 か月未満の子ども同士の食事（18 か月未満群：6 場面）、18 か月以上の子ども同士の食事（18 か月以上群：6 場面）の同年齢群を設定した。加えて、子ども 3 人の月齢が混合の食事（異年齢群：6 場面）の条件を作り、援助者の子どもへの関わり方について 3 群の比較を行った。

なお、各群に参加した援助者の乳児院経験年数、および子どもたちの月齢は次のとおりであった。18 か月未満群は、援助者の乳児院経験年数は 2～15 年で（平均 6.8 ± 5.6 年）、子どもたちの月齢は 9～15 か月であった（平均 12.8 ± 1.8 か月）。18 か月以上群は、援助者の乳児院経験年数は 2～8 年で（平均 5.2 ± 2.2 年）、子どもたちの月齢は 22～42 か月であった（平均 27.8 ± 4.4 か月）。異年齢群は、援助者の乳児院経験年数は 2～12 年で（平均 5.7 ± 3.7 年）、子どもたちの月齢は 9～42 か月であった（平均 21.7 ± 11.0 か月）。

撮影場面のうち、食事の始まりの 1 分間は援助者の移動が多かったため、分析から除外した。また、食事場面のうち、最も短い食事時間は 5 分 8 秒であった。そのため、食事開始 1 分後の 3 分間を分析対象とした。

4. 観察の視点

援助者の行動カテゴリーの内容

食事場面での援助者の子どもへの関わり方を測定するために、先行研究から以下のように援助者の 4 つの行動カテゴリーを作成した。

a. 食事介助

「食事介助」は、子どもに対する食事の直接介助やしつけに関する関わりである。

b. 情緒的体験の共有

「情緒的体験の共有」は、子どもからの情動や行動に対して、援助者が応答的に関わることである。本研究では、情緒的体験の共有に、調律行動、子どもの内的状態への言及や注意の共有を含めた。

情動調律は、二者の間で情動が共有された状態を示す用語である¹⁹⁾。青木²⁰⁾はこのうち、乳幼児の反応に対する母親側の応答行動を調律行動とし、その行動の生起を捉えた。本論も同様にその行動基準を採用した。

次に、子どもの内的状態への言及は、援助者が子どもの行動、表情、言動から子どもの内的状態を想像し、言葉がけする行動を指す。本研究では、園田ら¹⁷⁾の定義した欲求言葉（～が欲しいなど）、感情状態言葉（嬉しいなど）、感情状態を暗示する言葉（どうかしたの？など）、特別な感情を意味する言葉（痛いなど）、思考状態言葉（思う、わかるなど）を内的状態への言及として観察した。

最後に、注意の共有は、援助者と子どもが同じものに注意を向けている行動である¹⁸⁾。

c. 複数での食事体験の共有

「複数での食事体験の共有」は、援助者が 1 人の子どもだけでなく、複数の子どものうち同時に関わり、体験を共有しようとする関わりのことである。

d. その他

a～c に含まれない援助者の行動を「その他」に含めた。具体的には、表情なく子どもを注視する、援助者の食事をとるなど、子どもとの応答的な関わりがない行動である。

5. 分析方法

a～d の援助者の行動カテゴリーが 3 分間（180 秒）のうち何秒生起したかを評定した。評定の手法は以下のとおりである。まず、2 名の評定者が独立して、全場面のうちの 30%（5 場面）を評定した。次に、評定の一致率は Cohen の Kappa 係数で求めた。評定結果は、全カテゴリーで $\kappa = .79 \sim .86$ であり、十分な信頼性があると判断し、残りの評定はすべて著者が行った。

各行動カテゴリーの合計生起時間を算出し、子ども 1 人あたりにどの程度援助者が関わっているのか、同年齢群と異年齢群で比較した。さらに、月齢の違いを考慮した（18 か月未満児と 18 か月以上児）条件で検討した。

なお、2 群の比較には、分布の偏りを考慮して、

Mann-Whitney の *U* 検定を実施した。分析には、統計ソフト SPSS Statistics 22.0 を使用し、5% 水準未満を有意とした。本論では、10% 水準未満を有意傾向として、一部考察にて言及した。

6. 倫理的配慮

本研究は国立大学法人お茶の水女子大学人文社会科学の倫理委員会の承認を得て行われた(2014-74)。まず、施設長に子どもは分析対象外とする旨を確認し、実施内容について説明し、同意を得た。同様に、観察対象となる職員に説明をし、同意が得られた場合にのみ観察を実施した。観察データは、厳重に管理し、個人情報漏洩防止に細心の注意を払った。

Ⅲ. 結 果

1. 3分間のうち各行動カテゴリーの占める割合

分析対象全体と各群で、3分間の援助者の行動のうち、各行動カテゴリーが占める割合を算出した(図1)。その結果、分析対象全体では、「食事介助」34.04%、「情緒的体験の共有」20.37%、「複数での食事体験の共有」4.32%、「その他」41.27%であった。

18か月未満群では、「食事介助」33.15%、「情緒的体験の共有」20.83%、「複数での食事体験の共有」0.56%、「その他」45.46%であった。全体との比較では、「その他」が4.19%多く、「複数での食事体験の共有」が3.76%少なかった。

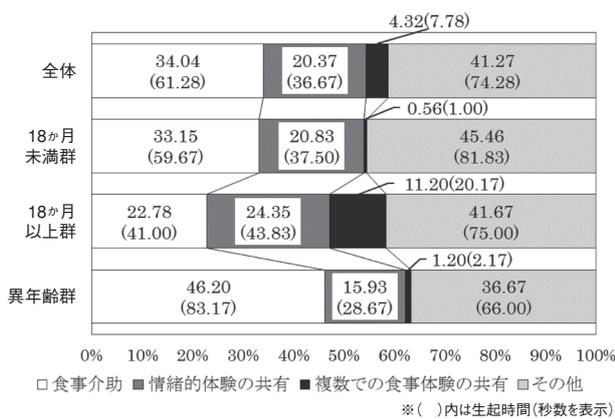


図1 3分間に占める各行動カテゴリーの割合 (%)

観察された援助者の子ども1人あたりに対する4つの行動カテゴリー(「食事介助」、「情緒的体験の共有」、「複数での食事体験の共有」、「その他」)の占める割合を示した図である。

分析対象全てを「全体」、18か月未満のみの子どもで構成された「18か月未満群」、18か月齢以上の子どものみで構成された「18か月以上群」、18か月未満と18か月齢以上の子どもが混合の「異年齢群」の4つに分け、各行動カテゴリーの占める割合を示した。()内は行動の生起時間が何秒あったのか示している。

18か月以上群では、「食事介助」22.78%、「情緒的体験の共有」24.35%、「複数での食事体験の共有」11.20%、「その他」41.67%であった。全体との比較では、「情緒的体験の共有」が3.98%、「複数での食事体験の共有」が6.88%多く、「食事介助」が11.26%少なかった。

最後に、異年齢群では、「食事介助」46.20%、「情緒的体験の共有」15.93%、「複数での食事体験の共有」1.20%、「その他」36.67%であった。全体との比較では、「食事介助」が12.16%多く、「情緒的体験の共有」が4.44%、「その他」が4.60%少なかった。

全ての群で「その他」は5割以下であった。このことから、どの群でも援助者が過半数の時間、積極的に子どもに関わっていることがわかった。

2. 子どもの年齢構成による援助者の関わり方の比較

次に、子どもとの応答的な関わりがない「その他」のカテゴリーを除いて、3群の18か月未満児および18か月以上児1人あたりへの各行動カテゴリーの生起時間を算出した。そして、18か月未満群または18か月以上群と異年齢群での援助者の関わり方を比較検討した。

i. 18か月未満児1人あたりへの各行動カテゴリーの生起時間の比較

18か月未満群と異年齢群の18か月未満児1人あたりへの関わり方の生起時間は、18か月未満群は、3分間のうち「食事介助」29.83秒、「情緒的体験の共有」18.75秒、「複数での食事体験の共有」0.50秒で、合計49.08秒であった。異年齢群は、3分間のうち「食事介助」37.00秒、「情緒的体験の共有」12.58秒、「複数での食事体験の共有」0.72秒で、合計50.31秒であった。

次に、援助者の関わりの「合計時間」および、3つの行動カテゴリーの生起時間を比較した。その結果、関わりの「合計時間」に有意差はみられなかったが、各カテゴリーでは、「食事介助」のみに有意傾向がみられた ($p < .10$) (図2)。

ii. 18か月以上児1人あたりへの各行動カテゴリーの生起時間の比較

18か月以上群と異年齢群の18か月以上児1人あたりへの関わり方の生起時間は、18か月以上群は、3分間のうち「食事介助」13.67秒、「情緒的体験の共有」14.61秒、「複数での食事体験の共有」6.72秒で、合計35.00秒であった。異年齢群は、3分間のうち「食事介助」16.67秒、「情緒的体験の共有」4.75秒、「複数で

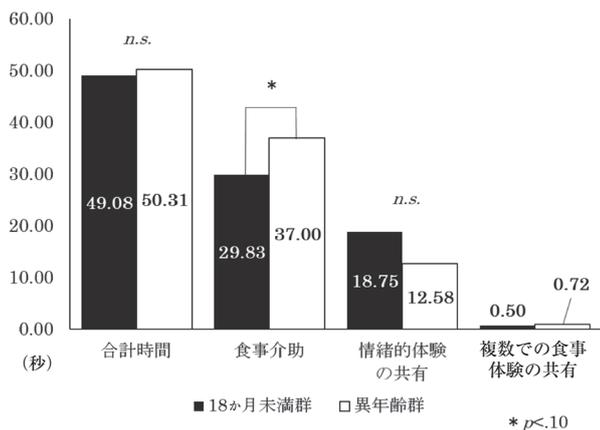


図2 18か月未満群と異年齢群の18か月未満児1人あたりへの各行動カテゴリーの生起時間

“18か月未満群”と“異年齢群”において、18か月齢未満の子ども1人あたりへの援助者の行動の生起時間を比較した図である。行動は、「食事介助」、「情緒的体験の共有」、「複数での食事体験の共有」の3つのカテゴリーと、3つのカテゴリーの「合計時間」を比較した。

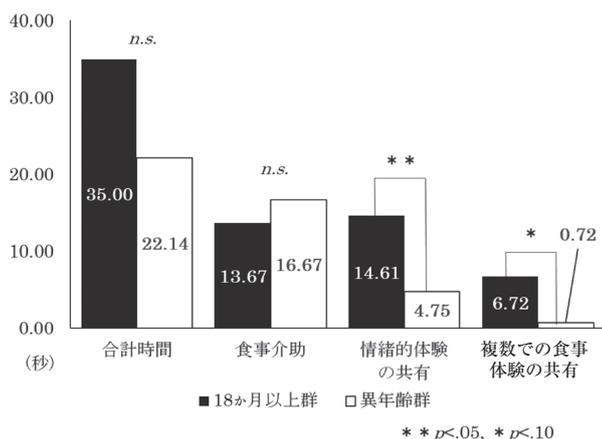


図3 18か月以上群と異年齢群の18か月以上児1人あたりへの各行動カテゴリーの生起時間

“18か月以上群”と“異年齢群”において、18か月齢以上の子ども1人あたりへの援助者の行動の生起時間を比較した図である。行動は、「食事介助」、「情緒的体験の共有」、「複数での食事体験の共有」の3つのカテゴリーと、3つのカテゴリーの「合計時間」を比較した。

の食事体験の共有」0.72秒で、合計22.14秒であった。

次に、援助者の関わりの「合計時間」および、3つの行動カテゴリーの生起時間を比較した。その結果、関わりの「合計時間」に有意差はみられなかったが、各カテゴリーでは、「情緒的体験の共有」に有意差がみられた ($p < .05$)。また、「複数での食事体験の共有」では、有意傾向がみられた ($p < .10$)。なお、「食事介助」では、有意差はみられなかった (図3)。

IV. 考 察

1. 子どもの月齢差による援助者の関わり方の特徴

まず、子どもの年齢構成の違いによる援助者の関わり方の特徴について、18か月未満群では、「その他」が約45%、次いで「食事介助」が約33%、「情緒的体験の共有」が約21%であった。一方で、「複数での食事体験の共有」はほとんどなかった。外山¹⁵⁾が1歳児は養育者から1対1で食べさせられることが多いと述べているように、18か月未満群は、援助者が食事を食べさせることを意識し、1対1の直接介助や声かけを中心に関わる傾向があるといえる。

18か月以上群では、「その他」が約42%、次いで「情緒的体験の共有」が約24%、「食事介助」が約23%であった。また、「複数での食事体験の共有」が約11%と、どの群よりも多かった。このことから、18か月以上群では、援助者が子どもの情動状態に合わせた言葉かけをしながら、その場の子ども全体に向けて、食事を促す傾向があるとわかった。18か月齢以上になると、言語表現が増え、対人やりとりが活発になる¹⁶⁾。そのため、毎日の生活をともにする同年齢同士の子どもでは、仲間同士で関わりやすくなると考えられる。援助者も言葉を使用した関わりをしやすく、食事の体験を共有しやすくなると推測される。

最後に、異年齢群の特徴について検討する。全ての群で「その他」以外の行動の合計が約55%以上あり、援助者が積極的に子どもと関わっていることが示されたが、異年齢群は約63%と特に多かった。援助者の関わりは、「食事介助」が約46%を占め、どの群よりも多く生起していた。次いで、「その他」が約37%であった。「情緒的体験の共有」が16%と18か月以上群より少なく、「複数での食事体験の共有」はほとんどみられなかった。つまり、異年齢群は「食事介助」が特徴の18か月未満児と「情緒的体験の共有」が特徴の18か月以上児がいながら、「食事介助」の関わりが中心になる傾向があるといえる。

2. 子どもの年齢構成の違いがもたらす援助者の関わり方への影響

異年齢群と同年齢群の18か月未満児と18か月以上児1人あたりへの援助者の関わりについて、関わりの合計時間に有意差はみられなかったが、同年齢群に比べ、異年齢群では18か月未満児への「食事介助」の生起時

間が増えることがわかった。18か月以上児への関わりでは、異年齢群の方が「情緒的体験の共有」や「複数での食事体験の共有」が減ることがわかった。また、異年齢群では、18か月以上児よりも18か月未満児への関わりが約30秒も多かった。

まず、異年齢群で食事の自立が進んでいない子どもに対する食事介助が、同年齢群よりも増える要因について考える。18か月未満の子どもは単語や二語文が出始める時期である。外山¹⁵⁾によれば、1歳児の食事場面での発話は養育者が中心で、2～3歳児になると徐々に発話の役割を子どもが担うようになる。1歳児に対しては、援助者は会話よりも1対1で子どもをよく見ながら食事介助を行う傾向がある。つまり、食事をとる目的を遂行するために、援助者はある程度自分で食べられる子どもより、介助が必要な子どもへ注意を向けやすくなるのだと思われる。

次に、異年齢群で食事の自立が進んだ子どもたちへの援助者の関わりが、情緒的な関わりや体験の共有よりも、食べさせることが中心となる要因について考える。子どもの言語理解の発達とともに、食事場面は会話を楽しむなど、コミュニケーションをとる場として重要視される。援助者も子どもの情緒に合わせた内的状態への言及がしやすくなり¹⁷⁾、声かけを中心に関わるようになる。しかし、食事自体が進んでいない場合、養育者は食事以外の会話を止め、食事へ注意を向ける傾向がある¹⁵⁾。異年齢群では、子どもの発達水準で求められる援助者の関わりは異なるうえ、子どもはそれぞれ多様なニーズを援助者に訴える。その場合、援助者は食事介助が必要な子どもたちとの関わりが中心となり、ある程度自立の進んだ子どもたちに対しては、食事をとれているかを確認するだけで手一杯な状況が考えられる。

加えて、年齢差のある子どもが同じ場にいるだけではコミュニケーションが成立することが少ない¹⁰⁾。今回の研究では、異年齢群における18か月未満児と18か月以上児の人数比率を揃えた詳細な検討はできなかったが、18か月未満の子どもが2人以上の場合は援助者の困難さが一層増大することが示唆される。

食事は栄養を摂るだけでなく、社会性を育む重要な側面をもつ。そのため、相互交流が生じる環境を大人が支えていく必要があるが、小規模グループケアでの異年齢群の食事場面では、コミュニケーションを維持することが難しくなる可能性が示唆された。そのた

め、小規模グループケアに移行後は、応答的な関わりが難しくなることを意識し、食事の自立が進んだ子どもへ積極的に話しかけること、子ども同士のコミュニケーションをつなげるように関わるのが重要であると思われる。例えば、声かけは、援助者が食事に参加するメンバー全体と体験を共有する際に多く用いられる関わり方である。このときの声かけが子どもの情動状態を想像したものであれば、子どもは情動状態を共有する体験を得ることができ、自己発達が促されていく¹⁹⁾。情動状態に合わせた応答的な関わりは、直接声かけされていないメンバーへの働きかけにもなり、食事体験の共有を可能にし得る。このような関わりを援助者が意識して行うことで、子どもたちが誰かと食事をとる体験を積み重ねることができ、楽しさや満足感のある食事につながっていくと考える。

また、毎日の生活の中で年齢差のある子どもたちが一緒に食事をとれることは、年下の子どもは年上の子どもの食事の仕方を見本とする機会になり、年上の子どもは自分がお手本となり、やれることの達成感を獲得できる機会になる⁹⁾。そのためには、援助者が子どもたちの発達差を理解しながら、同じ物を食べていることを共有する働きかけや、年上のできていることを認めながら、年下の子どもが年上の子どもの姿を見本にできるように工夫していくことが重要と考える。このとき、年上の子どもに見本となる期待をし過ぎ、負担になる場合もあるため¹⁰⁾、配慮しながら関わる必要がある。

最後に、小規模グループケア化によって、さまざまな生活場面で特定の子どもの援助者の関わりが密になる。そのことにより、子どもと援助者の関係性の構築が促されることになるだろう。しかし、食事場面に着目すると、小規模グループケア化が関わりへの密接さと直結しているわけではないことが示唆された。そのため、環境や養育形態の変化だけでなく、生活場面の一つひとつに合った関わり方を考え、実施していくことが重要だと思われる。

3. 研究の限界

本研究では、比較するサンプルが少なかつたため、援助者の経験年数や異年齢群の中の子どもの構成について、詳細に群分けし、比較を行うことが難しかった。今後は、サンプル数を増やし、援助者の経験年数による関わり方の違いや、子どもの年齢構成の詳細な

比較ができるようにしていく必要がある。また、援助者からの関わりに焦点を当てた検討を行ったが、子どものどのような行動が援助者の行動を引き出し、やりとりがなされたのかの検討には至っていない。子どもの発達に合わせて、援助者がどのように相互交流を変化させていくのか明らかにすることも、援助を考える一助となるだろう。援助者と子どもの相互交流の質を高める援助を行うために、子ども側の発信や関わりが起こった文脈を含めた検討、縦断研究による相互交流の変化のプロセスの検討を今後の研究で行う必要がある。

V. 結 論

子どもの年齢差のある食事では、食事の自立が進んでいない子どもたちへの直接介助が中心となり、食事の自立が進んだ子どもたちへの、援助者からの情緒的な関わりや、子ども同士のコミュニケーションを促す関わりが難しくなる可能性が示唆された。小規模グループケアでは、年齢差のある子ども同士での食事が増えることが予測される。そのため、年齢差のある食事では発達水準の異なる複数の子どもたちに同時に関わることを意識することが重要である。また、子どもの年齢によって食事時間をずらし、同年齢の子どもと一緒に食事をとれる機会を作り、子ども同士の横のつながりを育てていけるよう、働きかけていくことが必要である。

付 記

ご多忙の中、本研究にご協力いただいた乳児院の皆様、および貴重なご意見をいただいた青木研究室の皆様感謝を申し上げます。

本研究は、学術研究振興会 挑戦的萌芽研究（青木紀久代研究代表）の助成を受けた研究の一部である。本研究の内容の一部は、第31回国際心理学会議（ICP）（2016年7月 横浜）にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 増沢 高. はじめに—生活臨床と心理臨床をつなぐ—. 増沢 高, 青木紀久代編. 社会的養護における生活臨床と心理臨床. 東京: 福村出版, 2012: 7-12.
- 2) 青木紀久代. 生活臨床における関係性の援助への心理臨床的接近. 増沢 高, 青木紀久代編. 社会的養

護における生活臨床と心理臨床. 東京: 福村出版, 2012: 70-83.

- 3) Bowlby J. Maternal care and health. Geneva: World Health Organization, 黒田実郎訳. 東京: 岩崎学術出版社, 1967.
- 4) Van IJzendoorn MH, Juffer F. The emanuel miller memorial lecture 2006: Adoption as intervention. Meta-analytic evidence for massive catch-up and plasticity in physical, socio-emotional, and cognitive development. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 2006; 47 (12): 8-30.
- 5) McCall RB, Fish LA, Groark CJ, et al. The role of transitions to new age groups in the development of institutionalized children. *Infant Mental Health Journal* 2012; 33 (4): 421-429.
- 6) 厚生労働省. “社会的養護の現状について（参考資料）平成26年3月” http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_01.pdf (参照2017-06-01)
- 7) 厚生労働省. “新しい社会的養育ビジョン” <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf> (参照2017-10-01)
- 8) 厚生労働省. “社会的養護の推進に向けて 平成29年9月” <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000154060.pdf> (参照2017-10-01)
- 9) Bailey Jr DB, Burchinal MR, McWilliam RA. Age of peers and early childhood development. *Child Development* 1993; 64 (3): 848-862.
- 10) 菅田貴子. 異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究. 弘前大学教育学部紀要 2008; 100: 69-73.
- 11) 石島このみ, 根ヶ山光一. 乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用: 文脈の共有を通じた意図の読みとり. *発達心理学研究* 2013; 24 (3): 326-336.
- 12) Whaley KL, Kantor R. Mixed-age grouping in infant/toddler child care: Enhancing developmental processes. In *Child and Youth Care Forum*. Kluwer Academic Publishers-Human Sciences Press 1992; 21 (6): 369-384.
- 13) 河原紀子, 根ヶ山光一. 食事場面における1, 2歳児と養育者の対立的相互作用: 家庭と保育園の比較か

- ら. 小児保健研究 2014 ; 73 (4) : 584-590.
- 14) 古郡曜子, 菊地和美. 保育所・幼稚園における食の思い出調査—家庭でのしつけとの関連をふまえて—. 日本調理科学会誌 2009 ; 42 (6) : 410-416.
- 15) 外山紀子. 食事場面における1~3歳児と母親の相互交渉: 文化的な活動としての食事の成立. 発達心理学研究 2008 ; 19 (3) : 232-242.
- 16) 外山紀子, 無藤 隆. 食事場面における幼児と母親の相互交渉. 教育心理学研究 1990 ; 38 (4) : 395-404.
- 17) 園田菜摘, 無藤 隆. 母子相互作用における内的状態への言及: 場面差と母親の個人差. 発達心理学研究 1996 ; 7 (2) : 159-169.
- 18) 矢藤優子. 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話: 7ヵ月齢と12ヵ月齢を比較して. 発達心理学研究 2007 ; 18 (1) : 55-66.
- 19) Stern DN. The interpersonal world of the infant : a view from psychoanalysis and developmental psychology. New York : Basic Books. スターン DN, 小此木敬吾, 丸田俊彦監訳. 神庭靖子, 神庭重信訳. 乳児の対人世界. 東京 : 岩崎学術出版, 1989.
- 20) 青木紀久代. 調律行動から見た母子の情緒的交流と乳幼児の人格形成. 東京 : 風間書房, 1999.

[Summary]

Infant homes have been under the transition from large-group care (multiple infants and caregivers share a large room for daily living) to small-group care

(4-6 infants and 2-3 caregivers share a room for daily living) . This study focused on feeding and examined how caregivers' behavior towards infants has changed with this transition. We have divided the infants into three groups and videotaped the feeding sessions for each group respectively. The three groups are two same age groups : (a) younger than 18 months group and (b) older than 18 months group, and a mixed-age group which consisted of infants both younger and older than 18 months. We compared the caregivers' behavior in the three groups using the following four categories : "feeding," "sharing of affective experiences," "sharing of feeding experiences with members" and "other behavior." Results indicate that in the mixed-age group, caregivers interacted more with infants who are younger than 18 months. It leads to the increase of "feeding" behavior. Moreover, fewer "sharing of affective experiences" and "sharing of feeding experiences with members" with infants older than 18 months were observed in caregivers' behavior in the mixed age group. It is suggested that caregivers tend to pay more attention to younger infants. Active efforts needs to be made to interact equally with infants of all ages in the small group context.

[Key words]

Japanese infant home, small-group care, clinical approach to life, mealtime